■ 巻 末 座 談 会 ■

鶴谷主一氏の「幼稚園の現場からⅣ」を読んで、

障害のある友達と過ごすとは？

インクルーシブ教育、統合教育を考える

元小学校校長	「幼稚園の現場から」	「やくしまに暮らして」	「1工程@1円～」
石原愃	**鶴谷主一**	**大野睦**	**千葉晃央**
大野、千葉の元学級担任	原町幼稚園園長（静岡）	ネイチャーガイド（屋久島）	社会福祉士（京都）

26年前、大阪府豊中市では、障害をもつ友達とたっぷり一緒に過ごす学校生活があった。26年後の現在、静岡県沼津市に障害を持つ幼児を受け入れはじめた幼稚園がある。時間も地域も違うこの2つの実践現場。今回、障害を持つ友達と一緒に過ごすという共通の経験から話してみようと集まった。国がインクルーシブ教育（特別なニーズを持つ子どもも可能な限り、地域の通常の学校に在籍し、そのニーズにあった支援を受けながら、他の子どもたちと共に学ぶ教育）の方向を検討している現在、これからも同じような場面が存在するのは確かだ。障害を持つ子どもたちがいて、共に過ごす生活。そこでは、過去に何が起こってきていたのか、今何が起こっているのか、未来に何が起こる可能性があるのかをここであらためて取り上げてみたい。

対人援助学マガジン第 4 号の「幼稚園の現場からⅣ」（鶴谷主一著）を読んでいただきたい。この連載を読んで、障害を持った子と一緒に学ぶ教育（統合教育、インクルーシブ教育）が日本のごく限られたところでしか行われていないということに触れた記事（福祉新聞　2010 年 10 月 18 日号　1 面　「論壇　インクルーシブ教育との隔たり」嶺井正也）を思い出した。そこには、行われている地域として、大阪府豊中市があがっていた。対人援助学マガジンに連載中の大野睦さん、千葉晃央が育ったところは豊中。そこから、一気に頭の中はタイムスリップ。26 年前に、ある先生が私たちの小学校に赴任してきた時にさかのぼる。ちょうど数ヶ月前に、当時の担任、その石原愃先生と 26 年ぶりの再会をはたしていた 2 人は、自分たちの体験と鶴谷園長の体験が重なるところの多さに驚き、時の流れに左右されないものを探ってみたいと感じた。

福祉新聞 2011 年 7 月 18 号 1 面の記事によると、地域の小学校中学校で障害を持つ子どもも学習するインクルーシブ教育を進めようということを、現在、国は検討中である。では、これまで及び現在、障害を持つ子どもと共に学んできた学校、幼稚園をみることで、これから起こるであろうことが予測できる。予測できることで対応の準備もできるのではないかと考えた。

会場は、兵庫県の宝塚ホテルの会議室。静岡、屋久島、京都から、4 人が手弁当で集まった。

石原　鶴谷先生の対人援助学マガジン第 4 号の連載を読ませていただいて思ったのですが、幼稚園で説明会の時に「障害を持った子どもがクラスにいます」ということを、きちんと伝えていこうということをやり始めたことに関して、とても大事なことだと思いました。時代や、クラスや、学校によっては、「障害のある子がいることを伏せよう」ということがあった時期がありますからね。

いしはらひろし　満州生まれ。大阪府の教員として、豊中の小学校を歴任。教頭、校長も務めた。現在、自治会長を務め、子どもたちに向けた公園での遊びの会「おーい遊ぼぉーよ」を継続し、地域に向けた活動を精力的に行っている。大野、千葉の元学級担任。

障害を隠す

鶴谷　それは今もありますよ。卒園児の話しですけれども、卒園してから自閉症という診断が出たんです。小学校の在籍している学級で、お母さんは子どもに障害があることをカミングアウトしたくて仕方がない。

けれども、先生がカミングアウトに関しては駄目だという。そんなことを言ったら大変なことになると。先生にしたら、他の親からクレームが来るんじゃないかな、という懸念があるようです。結果、カミングアウトさせてくれていません。多分、クラスの先生にもよると思うのですが、学校全体の方針ではないようです。その話をきいて、ちょっと残念だなと思っています。今も昔も変わってないなぁと。ただ僕も、障害を持った子がいますと明言する幼稚園の方針を出す前までは、もっとどこにでもある一般の幼稚園でした。障害を持った子どもをなんとなくは受け入れていたけれども、こういうふうにはっきりした方針は出していませんでした。そのことへの私の反省の上で、方針を出した方がいいだろうと判断しました。

（写真）

つるやしゅいち　京都市山科生まれ、３歳から中学まで九州宮崎市育ち。田舎を飛びだして高校は新潟のミッションスクールに通い、大学受験に落ちて実家の幼稚園を手伝っているうちに幼稚園が面白くなり、東京の専門学校で幼稚園免許と保育士資格を取得、そのまま東京の葛飾みどり幼稚園に５年勤務、その後恩師の誘いにより香港のオイスカ日本語幼稚園に２年勤務、帰国と同時に東京時代に結婚した妻の実家（原町幼稚園）に勤務して現在に至る。

反対！

鶴谷：反対派も、もちろんいて「園長に直訴しよう」という動きが保護者からありました。職員からはなかったです。その保護者は「障害児をどんどん入れたら、たまらない」ということで署名をしようという動きでした。それが、僕の耳に入ったんです。けれども、その人は署名が始まる前に、「どうしても黙っていられない」と私のところに来られました。お話をして、だいぶ納得されて、実際には署名活動はありませんでした。ちょうど今は、障害を持っている子も成長して、トラブルのようなことが起きなくなっていました。

千葉：子どもがちょっと変化したからですね。

石原：子どもが変わると、親御さんの気持ちが動くからね。

経験に左右される意見

鶴谷：年少の時に、障害を持った子に暴力的なこと等をされたと感じているお母さんたちは、やっぱりマイナスのイメージを持っています。そういうことがなかったお母さんたちは、そうでもないです。クラス替えがあって、担任に家庭訪問で、全ての園児の家庭にきいてもらいました。「障害を持った子がいることに関して、どう思っていますか？」と。やられたと感じているお母さんは、やっぱりちょっとこわいと応えました。何となく頭ではわかるけれども、気持ちではなかなか…ということでした。以前、そういった接触がなくて、新しいクラス編成で障害を持つ子と一緒の組になったお母さんは、幼稚園の障害を持った子に関する方針をみて「何かいい経験をさせてもらえると思っています！」といってくださることもありました。だから、自分の経験で、障害を持った子にやられたという印象を持っていなければ、結構受入れはしてもらえます。ただし、障害を持った子が、また同じ子どもに対して、何度も同じような関わりを繰り返すようなことになると、また、保護者の方々の意見もくすぶり出しますね。

障害の問題にすり替わる

千葉　普通に、仲が悪い子ども同士もいますよね。障害があることで、相性の問題かもしれないのに、相性ではなくて、障害を持っているからだと「すり替わる」のが、

おおのむつみ　大阪府豊中市出身　日本福祉大学卒。屋久島に移住し、ネイチャーガイドを務め、有限会社ネイティブヴィジョンを設立　代表取締役。ウミガメの保護活動にも従事。「やくしま森祭り」「東京森祭り」等も主催し活躍をしている。

難しいところですね。「障害児問題」みたいなところに。

鶴谷　普通の子どものいさかいと同じように考えればいいんだけどね。

千葉　障害の有無に関係なく、相性が悪い子たちもいますもんね。

鶴谷　そう。

石原　保護者の気持ちの中で、障害を持っている子がいるから教育環境がよくないのではないかと、ずっと思っているところもあるね。だから他の子に叩かれたことは何も言わないけれども、障害がある子が叩くと「そんな子が自分の子のクラスにいるから…」という意識が出てくる。障害の子が何かしたことをきっかけにして。ケンカはどんな子でもするからね。咬む子もいるし、蹴る子もいるしね。そうとらないで、障害を持った子がいるから…ととらえるというところが、まだまだありますね。

鶴谷　障害のある子の問題にはしないという感覚を、自然に持て！ということはやっぱり難しいかもしれません。だから、園の方針として出すことにしたんです。

石原　大事やと思いますね。園がしっかり方針を示すことで、保護者も安心しますね。

千葉　「障害児を受け入れません」と案内に書いている幼稚園もありますよね。

鶴谷　もちろんあります。幼稚園に入園をいっぱい断られてきて、私の幼稚園に来る障害を持った子もいます。私のところは幼稚園と保育園と隣にあって、現在、保育園にも障害のあるお子さんを入れて欲しいというのがあります。けれども、経営との兼ね合いが難しいです。どんどん入っていただくというわけにはいかないのが現実です。

経営の難しさ

鶴谷　私立は難しいところがあります。どうしても、営業、経営と幼稚園の評判というものが一体になっていきます。今のところ、私の幼稚園は「あったかい」、「なんか面白いことをやっている」、「楽しいことやっている」という感じで保護者の皆さんに支持されています。けれども、「障害児を受け入れる」というような噂が広く出てしまって、障害がある子ばかりが来たら、それはまた困ったことになります。

この前、障害を持つ園児のお父さんが電話をくれました。発達に関して、病院で調べてもらったら、驚くような発達をしているといわれて喜んでおられました。悪いところは何もないといわれました、と仰っていました。その話を聴いて、残念だったのは、自分が経営者じゃなかったら、よかったですね！と率直に喜ぶことができます。けれども、もちろん、喜んでいる自分がいるんだけれども、障害児として診断書が出なければ、今度は幼稚園の経営としては補助金が来ないということになります。補助金が来ないと、今加配の専属で、その園児さんについてもらっている先生の人件費が出ないというような問題が出てきます。そうすると、あんなに喜んでいるのに障害がありますという診断書をもらって欲しい、というお願いをしなくてはいけないんです。

一同　あー、なるほどね。

鶴谷　だけど、その専属の先生をつけないと、やっていけないというのは事実です。いくら医者が問題ないと診断しても。そのジレンマで、悩みますね。

石原　それは園長という立場としては悩むところですね。

ちばあきお　大阪府豊中市出身。社会福祉士。立命館大学大学院　応用人間科学研究科　臨床心理学領域　修了。社会福祉法人京都国際社会福祉協力会、京都造形芸術大学　勤務。知的障害者施設支援員、教職、家族面接スタッフ等として従事。

鶴谷　それを園の経費を削ってでもいいからやれ！ということは、もちろんできるけれども、引き受けた以上、退園はさせたくない。加配の先生に「ごめんね、雇えなくなった」となると先生へのシワ寄せが出てきます。先生も悠々と子どもを保育していられなくなります。職場が大変になってしまうと、みんながギスギスしてしまいます。そうはならない制度があるといいなと思います。障害があるから保育料を 2 倍いただきますというわけにはいかないわけですから。私の幼稚園の担当行政では 5 月～9 月に障害を持った園児がいるかいないかを出さないと加配の補助金対象にはなりません。そういうふうに線を引いてきます。

石原　先生が一人いるか、いないかでだいぶ違いますからね。

鶴谷　やっぱり、補助金の対象にならないと幼稚園全体の負担は増えます。経営者として、その環境に関しては最終の責任がある立場です。そうすると、先ほどの喜んでいる保護者の方に対しては申し訳ないけれども、「障害があります」という診断をもらってきて欲しい、とお願いするしかないのかと悩みます。

石原　なるほどね。

鶴谷　そうすると嫌じゃないですか、園長は金のことばかりいってとなるとね。結局は、そういうジレンマです。例えば、私の園は、先ほども触れたように保育園も運営しているんですが、先日保育園に入園希望で来られた方のお子さんで、明らかに一人診断書をもらっていないのですが、明らかに一人では集団の中で過ごせない様子です。その保護者の方に、診断書をもらってもらえますか？もらってくれると入園できます、ということになります。

大野　必要なのでしょうけれども、そこは行政にきっちりサポートをしてほしいね。そういうストレス。

鶴谷　そこのストレスで、幼稚園はみんな悩んでいます。だから、そんな手間のかかることをするのなら「障害を持つ子の入園に関してはお断りします」っていうことになってしまう。

千葉　障害者雇用と似ていますね。補助金制度があるかないかで、現状が左右されるというところが。

大野　だから経営者としては、できる責任を自分のところでみる。それができるだけの経営的な体力がなければ…ですよね。

鶴谷　そうなんですよ。それで、障害児を受け入れて、なおかつ保育効果が上がらなければ、評判は落ちてしまうわけですしね。

千葉　悪循環になりますね。

鶴谷　そうそうそう。

大野　なんのために？ってね！

鶴谷　そうなんです。

千葉　大事なところですね。

大野　そういうことが障害者に限らず世の中のいろんなところで起こっているのだろうなっていうところやね。

鶴谷　現実的な悩みです。今のところ、うまく回っていますけれども、診断書をもらわないと行政の補助が受けられないというところがね。いくつかあるハードルの一つですね。

千葉　そういうことを私たちが知っておくのがまず大事やね。

ノーマライゼーション？

鶴谷　幼稚園で、障害児を引き受けることは、子どもたちのノーマライゼーション意識を育てる上でメリットがあります。でも実際に専門知識も無い僕らが受け入れるということは、経営的、保育的に結構高いハードルがあります。経営的な面は先ほど話しましたが、保育的にも苦労があります、障害のある子どもの発達を保証するための個人プログラムを立案出来るような保育者は一般の幼稚園にはいない訳です。ただ預かって、その子が居心地のいい環境を作る。そして先生と子ども同士の関わりで発達してくれることを期待するしかないんです。「たぶん一緒に保育すれば発達する」と思っても、根拠は経験しかない。
一生懸命やっているからいいでしょう！という訳にはいかない、障害のある子どもを含めてクラスの子どもたちみんなが成長発達していくための良い保育をしなければならない義務があります、大きなトラブル無しで。

そんな私立幼稚園の状況で、メリットとデメリットを天秤にかけたとき、なかなか吊り合わないと考えて障害児の受け入れが進まないのではないかと思います。

大野　理想論でいえば、こういう現実に関する発信があることで行政を変えるような、動きになるといいけどね。

鶴谷　以前の別の自治体では、障害があると認定すれば、その時点で補助金対象として認定するというシステムを取っていたそうです。だから、幼稚園も障害を持った親御さんたちも、みんなが喜びあえる。今は5 月の段階で人数を行政に報告をして、その予算枠を決める。何人で、いくらですと。だけど、本来は予算枠なんて決められるわけない。途中から、わかることもありますからね。

同じじゃなくていいよ

鶴谷　うちの幼稚園の下地として、「みんなが同じじゃなくていいよ」という考え方がベースにあります。だいたいの幼稚園は、みんなを同じにしたがります。うちは、例えば給食を週 2 回していますが、毎日お弁当でもいいんですよ。弁当で貫き通したいお母さんは弁当にしてもらって全く構いません。ひとクラスのなかに、お弁当を食べている子あり、給食を食べている子あり、そのような風景をつくりたかった。それに慣れて欲しい。みんなが同じではない場面をつくると、みんなが一緒じゃなくてもいいんだ、という意識が子どもたちに自然と育つからです。そういうものが育っていないと、障害がある子たちが入っても、みんなと違う！ってなってしまいます。

誕生会は、誕生日を迎えた子がみんなの前で、舞台の上にあがってインタビューしてもらうんですけれども、障害を持った子の誕生日の時は本人もいつもと違う場面ですので、なかなか落ち着かないこともあります。それでも、みんなは落ち着いて、待っているんですよ。きちんと説明もしていたので。

千葉　子どもたちには、どうやって説明したんですか？工夫とかされていますか？

鶴谷　みんなに説明しています。園児たちにわかる言い方なので「〇〇ちゃんは、まだ少し赤ちゃんだから、みんなが座ってい

る時に座っていられないこともあるよ」という話しをしています。それをしないと比べる子がいます。「あの子は遊んでいるのに、僕はなんで遊んじゃいけないの？」と。それがきっかけの一つになって、クラスの雰囲気が乱れてしまう時もあります。それでも、時間がたつとその障害を持った子との付き合い方も、だんだんわかっていくんです。その子がこうなっている時には、こうした方がいいかなとか。

今回、原町幼稚園の園便り『はらっぱ』に障害を持った子の保護者からの手記を掲載しました。そうすると他のもう一人の障害を持った子のお母さんも「私も入れて！私も書きたい！」「いいたい！」という話しも出てきました。他の健常児のお母さんからは「よく分かりました！」というようなメールをいただきました。そういった反響を今もらっています。少し変化が出ているという感じです。手記を書いてもらってよかったと思っています。

石原　なるほど、のびのびしているから、子どもの良い面が出やすいですよね。押さえつけたり、子どもをみんな一緒にしようとしたりしていないと。よく枠にはめてしまうからね。（大野、千葉をみて）君ら、枠にはめられんでよかったな～。

一同　（爆笑！！）

大野　思いっきりはまっていない、感じ。

千葉　そうかも。

怒って退園

鶴谷　市内の他の幼稚園でも障害を持った子を受け入れていますけど、私たちのような方針は出していません。僕も、方針を出したのは今年の 3 月です。毎年、障害を持った子が 1 人、2 人はおられますが、数年前はそのあたりはタブーという空気がありました。ずっと前に、幼稚園側からみて障害があるのではないかと思った子どもがいて、そのお父さんが養護学校の先生でした。だから分かっているだろうと思って、お父さんに、「ちょっと診断を受けてみられたらどうですか」っていう話をしたら、怒って退園してしまいました。その頃はカミングアウトなんて、とても難しいと感じていました。「ちょっとあの子は、あれらしいよ」というまま受け入れて、みんなにはだんだんわかっていくような雰囲気でした。先生たちはもちろんわかっているけれども、でも親にまでははっきりとはいわない時代が最近まで続いてきました。僕はあのショックなこと（※）があったから、「はっきりしなくてはいけない！」と思いました。あの時、保護者の方に、そういわせた(※)のは私の責任だと思いました。（※　幼稚園の行事のあと、障害を持った子の親が「あの子とは来年同じクラスになりたくないね。」と話しているのを鶴谷園長は偶然耳にした。）

大野　でも変な言い方ですけれども、それが一つのきっかけになったわけですよね。

鶴谷　そうです。そのきっかけがなければ、今まで通り、何となく障害があるかもしれないという相談を、個人的に受けて、個別的に「じゃあ、どうぞ」となんとなくしてきていましたし、今もしていたかもしれません。でも、一方で限界を感じてきていたのは事実です。そのショックな出来事がある前、一学期の保護者会の時に、障害を持った子の保護者の方に、皆さんの前でごあいさつしてもらったりだとか、「こういう障害があります」ということは口頭で伝えたりはしていたんです。だけど文章化して、他の学年とか、他のクラスにまでは言っていませんでした。クラスのお母さん方には、理解してもらおうと思っていました。かみついたり、たたいたりということがあったので、障害を持った子のためにも、みんなから排除されるといけないからということでしていました。「よろしくお願いします！」というようなことを伝えたけれども、今のように公には出していませんでした。その事件があってから、一生懸命方針を考えました。なので、もともと統合教育とか、理解があってやってきたわけでも、研究してきたというわけではありません。本当に一般の幼稚園でした。

親が許せるか？

千葉　私は、鶴谷先生の園の方針のなかで、「許す」というのがとても面白かったです。

鶴谷　どう書いたら親が納得するのかなと思って。

千葉　「許す」っていうのは、心理学的な視点からみても紛争後の人々の心情の問題においても、「許す」ということがずっとテーマになるとききます。幼稚園の段階で、それを上げているということは、すごいことじゃないかなと思ったんですよ。紛争などの国際関係という観点、歴史的観点からも、大事なキーワードの「許す」ということが含まれているのがすごいなと。

鶴谷　これは僕の名前を見るとわかるんだけど、牧師の息子です。「許す」というのは、キリスト教では、当然の当たり前のことで、それが僕に身についていて、それがここに出てきたのかなっていうような気がします。許せる方が気が楽になるっていうことで、みんな納得してくれると思うのですけども。

　子どもはケンカをしていても、途中から笑ってしまっている子もいます。だから、問題は親が相手を許せるかどうかです。うちの子ばっかりやられているとか、子どもは許しているのに、親が許していないことも多いです。そういう状況があるから、子どもと同じ目線でいきましょうよ、ということを言っておきたいなと思いました。そこからの視点だったんです。

担任はやりたくない

千葉　あらためてですけれども鶴谷先生の対人援助学マガジンの 4 号の連載を読ませていただいて、私は本当に心が動きました。石原先生と過ごした、自分の小学校の時代を思い出したような気がしたんです。

石原　ずいぶん昔のことなので忘れていることもありますけど、私も重なるところが

ほとんどでしたね。鶴谷さんが学校とか、園とか、担任の方で、どんどん悩みが出てくるなかで、いろいろ取り組んでおられるのをみると、昔を思い出して、一緒だなと思いました。障害のある子がクラスに来るというのは、そのクラスの担任を希望するという先生が少ない時期でした。

千葉　クラス担任は希望できまっていたんですか？

石原　そうです。クラス分けは、校長先生がここのクラスは、例えば 5 年 1 組なら、〇〇さんという障害を持った子がいると、まずは先生にきいて、担任を決めますからね。先生にどうか？ときいてね。豊中の場合は、学年の担任の先生になる先生たちが集まって、あとは誰が持つかという話しをすることが多かったですね。校長が決める時もありました。その時には、校長から事前に「持ってくれますか？」というのがありました。いずれにしても障害を持った子がいるクラスを担当することを敬遠する先生が多かった時期があったのは事実です。

千葉、大野　そうなんですね。

石原　障害の有無とかに関わらず、みんなと一緒に生活しようということでやっていましたね。この新聞（先述　福祉新聞 2010 年 10 月 18 日号）にも書いてある通り、豊中は進んでいたと思いますよ。全てのクラスで障害を持った子を受け入れようという教育の姿勢でしたね。普通の子どもたちと同じようにしていこうというのが、基本的にはあったけれども、まだまだ障害児教育というのが広がっていない面もありました。

障害を持つ子が、やっぱりクラスに入ると、クラスが悪い方向にいった場合、担任の責任ということになります。その時には、親から意見がしっかりとあがってくるから、そのあたりの結末を先生たちはよく知っていましたね。だから、自分は避けようとしている人も結構いました。やっぱり苦労はあったと思います。

大野　だいたい、クラスに 1 人障害を持った子がいましたね。学年に複数いたので。

石原　そうです。

鶴谷　それは豊中市がそういうふうにやろうといっていたんですか？

権利要求ばかりではなく

石原　市も、先生方も、ある意味ではしっかりしていたところがありました。先生方も、権利要求ばかりではなくて、何かを要求しようと思ったら、教育の中身も作っていかないといけないというのが、基本にありました。私が若い時はそういうふうに感じてやっていましたね。その中で実践を充実しようということで、いろんな研究会等をつくって活動したのは事実ですね。私らの先輩の人がその土台をつくってくれていました。私がたまたま新卒の時に勤めた学校が、人権教育の推進校でした。校区に同和地区があるところでした。そういう意味では、人権教育の基本的なことを、徹底的に学ばせてもらったというのはベースにありました。しかし、そのときはまだ障害がある子が来ても、一人の先生が別の部屋で関わるかたちをつくってやっていましたね。

大野　私たちの時は、どうやった？

千葉　一日の 2 時間ぐらいは、障害を持った子は特別学級で、他は一緒の教室で、障害を持った子は別の課題とかをしていまし

たね。

大野　それを、なくすことについて話し合ったことがあったなぁ。全部、障害を持った子と一緒に授業を受けるために、どうしたらいいのかを話しあったことがあった。

千葉　クラスで話しあったん？

大野　そうそう。

千葉　すごいな。小学生の課題とは思えない。

大野　何がきっかけやったかな。今思うと、画期的よね。そういうことを自分たちで話し合ったということが、学校生活がやらされているのではないと感じたでしょうし、別の特別学級にいくということがどういう意味なのかっていうのを考えて、話しあったんだろうなと思います。なぜ、分けなきゃいけないのか？とかを考えますよね。

クラスの居心地

石原　その当時、そのことについて悩みながら書いた５年１組の学級新聞「GOGO 新聞」を持ってきました。

【Ａ君と心が繋がるのはいつ？】

GOGO 新聞（1983 年〇月×日発行）から抜粋

水曜日の 3 時間目は図画の時間で、みんな外で下書きをしていた。Ａ君も書いていた。チャイムが鳴って、休み時間になった。全員靴箱に行った。授業が終わって、靴を置いて教室に帰って来た。そのとき　5、6 番目にＡ君も来ていた。そして 4 時間目始まりのチャイム。ところが、Ａ君は席にいない。4，5 分先生は黙っていた。さすがにタイガー班の人から、「おいＡくんはどこに行った？」という声がきこえる。何人か探しに行かせた。ふとドアのところを養護担当の先生が顔をのぞかせる。「実はＡ君がたけのこ学級をのぞきに来ているんだけど、どうしましょうか？しばらく様子でもみましょうか？」「Ａ君たけのこ学級に行っていましたか？そうですか？では 4 時間目はそうしてもらいましょうか？」と私は言い、養護担当の先生は帰られました。しばらく黙って、先生（石原）は学級目標を書きながら、みんなの様子を見ていた。先生は白い色をその時塗っていたが、先生はその色よりも寂しかった。4 月から 5 年 1 組がスタートして、初めてＡ君が席にいない。誰にも言わずに行ってしまった。心の中にはきっとＡ君なりの不満なりがあるのだろうと思うと寂しくてたまらなかった。そして、何分かたっていった。「Ａ君は何をしに、なぜ、別の部屋に行ったのだろう？言ってごらん？」沈黙が続く。ぱっと書いている手が止まり、鉛筆が止まる。こちらを見つめる。うつむく。何人かの顔つきが変わって来た。みんなの表情が変わって来た。思ったより多くの人の様子がかわる。ああ真剣に考える人がいて、よかったと思った。しかし、まだ誰も先生の問いに答えてくれない。先生よりも、4 年間長く付き合ってきた仲間だから（※当時、石原先生は転任してこられた初年度。大野、千葉がいた５年１組を担当していた）きっと、いろいろ言ってくれるものと思っていた。ずーっと静かな時が流れる。先生は学級目標の「クラスをつくる　自分をつくる」の色を塗り終わろうとしていた。（※クラスの目標として大きく掲示されていた目標の掲示物）今は

この言葉は、本当に言葉だけだなと思いながら。が、突然Y君が立った。「A君は寂しいから行ったと思います」続いて、6、7人が次々言った。誰もが似たようなことを言った。次に、「これから、みんなどうすんねん？」という私の問いに対して、寂しくならないようにいろいろみんなでするという意味のことを、また7、8人の人が言った。もっと多くの人が言って欲しかった。心の中の声をみんなに言って欲しいと思った。そうしているとチャイムが鳴った。A君がドアを開けた。みんな一斉に見た。A君は、とてもうれしそうな顔で入って来た。先生はショックだった。やっぱり今は、5の1よりも、たけのこ学級の方がよかったのか？と思うと、次の言葉を言うのがためらわれた。言葉がすぐ出なかった。そのあと黒板に図を描きながら、ずっとA君は5の1よりも外に行くことの方が楽しそうに見えると考えていた。残念だけど、はやく5の1にいる方が、うれしくてたまらないようにしたいな。果たして何人の心に響いてくれただろうか？不安と期待の入り混じった出来事であった。この日の出来事を、1組の1つの階段として、1段1段登っていきたいと思い、1組の目標に書いてあった「クラスをつくる　自分をつくる　輝く目になれ　動ける体になれ　そして　心を開け　信じあえ　認めあえ　そして　ともに高まれ」この目標の意味をこれからつかみ、そこを目指して前進したいと思う。この日の何人かの人の思いを見てみよう…。（※この続きには、この当日の児童の日記が抜粋、掲載されていました。）

石原　やっている私の方も、こたえというのがない。どの先生も悩みながらと思います。

千葉　先生たちの意見は一致していたんですか？学年のなかでとか。

石原　どんなふうにしようかというのは学級担任任せ。あんまり言いにくい面もあるし。子どもによって対応が違うからね。情報交換がうまくいっている学年は、学級新聞を他の先生に配りあったことも、よくありました。お互いに高め合うことをやっているメンバーになると、フリーにそういったことができましたね。でも、先生のメンバーにもよりましたね。このような学級新聞を出さない先生には配りにくかったですね。

全体として取り組む

千葉　こんなことをきいたのですが、障害を持った子と一緒に幼稚園、学校で過ごす上で、担任の先生一人ががんばろうとしても無理。せめて学年そろって。でも、学年そろっても、それでも難しい。学校全体、幼稚園全体でないといけないという話しでした。どう思いますか？

石原　その通りやと思うね。その当時も、学校としては、障害児教育とか、教育の中身的なこととか結構話しをしたり、研究会とかもしたりしましたよ。

先生同士の研究会、研究授業というのを、豊中はやっていて、その当時は結構熱心でしたね。豊中市レベルでもあったし、学校独自の学校内部のものもありましたね。そうしていかないと、お互いに高め合っていくことがないからね。自分のクラスだけ1

年間見ていてはダメで、他をみたり、学びにいったり、意見交換をしていかないと。学校行事で修学旅行とか、林間学校という場面は、特に自分のクラスだけを知っていたらいいというものではできないものでした。他のクラスの障害を持った子のことも、知っておかないといけないし、どんな事態に関わることになるかもわからないから。そういう意味では、関係を、そして、連絡を密に学年でもしておかないといけません。そのためにも、学校としてしっかり方針を持ってやるということはとても大事です。

千葉　今おっしゃったのは、教員と学校についてですけれども、それ以外にも PTA とか、保護者とかもありますよね。

前の方に座ってはいけない

石原　そうそう。それで、今は特に親との関係は厳しい時かもしれませんね。先生のやり方にもよるので、どの時代にも難しさはありますけどもね。

あの当時、大野さんと千葉君と一緒だったA君ね。そのお父さん、お母さんが苦しんだ事件もありますよ。A君を始めて受け持って、学級通信とかに、さっきみたいにA君のこととか、それに関連して、他の子が先生に怒られたことを書いていると、A君だけ何で？とか、それだけをなぜ取り上げないといけないのか？という意識が保護者の方々に、たくさんあったみたいです。学級懇談会、保護者会で、黒板の前に私がいて、席をコの字型にして座ってもらっていて、たまたま、そのA君のお母さんが前の方に座ったんです。私の近い方に。後で、聞こえてきたのは「なんでAくんのお母さんが前に座るねん！」と、こういうことをいう人がありました。障害を持った子の親がなぜ前に座るのかという意識が保護者にまだありましたね。ものすごいですよ。

鶴谷　こんな小さいところでね。

石原　家に伺った時にきくと、A君のお母さんが言われたとおっしゃっていましたね。そんな時代やったね。でも、親はかわっていないところがあるかもしれませんね。

鶴谷　そうです。親は今もかわっていないですね。それと、福祉関係の人の意識と、一般の人の意識と、ものすごい差があると思います。

変化を保護者に伝える

石原　今回いくつか伝えたいと思ったことがあります。一つは、保護者の意識向上とかいうけれども、そのためには、クラスのなかで自分の子どもがどんな動きをしているのか？どう活動しているか？を保護者に知らせないといけない、と考えています。良い姿、悪い姿は別にして、悩んでいる姿もあり、あの子とこの子がこうなっているとか、ケンカしたことでもいいけれどもクラスで起こっていることを伝える。高学年になったら、子どもは親の前であんまり話さない。女子の場合は話しているかもしれないけどね。

千葉　男は特に親に学校の事を話さないですね。

石原　話さないでしょ。先生に怒られた！とか、あんまりいわない。だから、子どもが学校で活動している、できるだけいい面

を情報として親に伝えないといけないということが、今日伝えたかったことの１つですね。

千葉　それは学級通信を使ってということですか。

石原　それに限らずに、話してもいいし、訪問してもいいし、いろんな手はありますよね。

千葉　障害を持った子がクラスにいるかどうかということに限らずということですか？

石原　そうそう。学級づくりとして大事ですね。言いかえれば、子どもが変われば、親も変わるということで、これしかないと思ってきました。親に意見を言ったり、私はこう思っています！と言ったりしても、説得のレベルでしかありません。もともと説得できるような内容ではありませんしね。親は自分なりの育て方を持ってやっていますから。

　でも、最近になればなるほど、親は先生をある程度軽くみているようになりましたね。当時は、親は先生を尊敬している人が多かったから、先生の言うことを聞いていたらいい！という時代がありました。保護者がまだそんな意識でしたね。若い先生でいきなり担任しても文句ひとつ言わずについてきてくれた。今は先生が「こうやります！」「こんなんやっています！」といっても、親はなかなか心を動かしてくれない。けれども、子どもがちょっとでも成長しているのがわかった時には、親は変わっていくものと信じています。

大野　親がはっと思う瞬間なんだろうね。自分の子がこんなこと言ったんだ！と。「あ

んた何言ったの？」と親が子にいうきっかけづくりが学級新聞にあったんだね。

何も起こらないことは？

石原　そういう意味ではずっと、Ａ君と関わった頃か、もう少し前から思っていたのは、親はかわってもらわないといけない、けれども、親と子と先生とは一緒にやらないといけません。鶴谷さんがいったみたいに、急にはかわりません。だけども、きっと幼稚園の場合なら、ここの幼稚園に行きたいという保護者が絶対増えるからね。ここの学級いいなと思えば、この学級にずっといたいとか思うし、一緒だと思いますね。だから、子どもがよくなれば親も変わってくる。子どもがかわれば、親もかわるんじゃないのかというのは基本的にずっと思ってきたことです。でも、子どもをかえるのも難しいよ。学力は急には上がらないし。すったもんだの取り組みも時にはしないと…。

千葉　鶴谷先生も原町幼稚園の通信『はらっぱ７月号』で、幼稚園が園庭に遊具を置かなくなっているのは、園内事故が怖いか

らで、でもそういった場面を経験して、危機回避の経験の蓄積が低くなっていることの影響について（本当の事故に直面した時に対処できる経験が子どものなかに担保できなくなるのではないか？という指摘）書いておられましたけれども、そういった日常で、いろんなことが起こりながらも子どもたちが成長していくというところを省いていっている近頃の傾向ですよね。

鶴谷　そういう傾向がもう全体にありますね。

千葉　家庭へのアプローチ、啓蒙って大事ですよね。そう思うと先生方の「GOGO 新聞」、「はらっぱ」は大事ですよね。日々の現場での援助だけやっていてもよくない。並行して別のチャンネルでも進めないと。

鶴谷　そう、そこで、関わる人の気持ちを変えていかないと難しいです。

千葉　私がこれまで関わってきた福祉現場も、そのあたり得意ではないですね。

学級づくり、学校づくり

千葉　お話をきいていると結局、障害を持っている子がいるクラスづくりとかではなくて、学級づくり、学校づくりを、いかに一生懸命やるかで、その結果として、障害を持った子がいても対応できていくのかなと思うんですがいかがでしょうか。

石原　まさにそうですね。思っていたのは、「障害を持った子のために」、「その子のために」、ではなくて、常にクラスに「動き」をつくりたかったわけ。全てに。だから授業であったとしても、常にその中で「動き」をつくる。そんなクラスになればいいなと思ってきました。だから障害がある子のためにということではなくて、自然と障害を持った子に「A君いくで！」といったり、そのなかで「A 君、何をしているねん」と障害を持った子に怒る子もおれば、ケンカをして泣く場面もあり、そんなことがどんどん出てくればいいな、というのはすごくあったからね。

大野　自分自身が自閉症っぽいといわれていた経験もあったから、「障害児のために」とかいうような、「障害児であると分ける」ということ自体に関しても、本当に考えますね。

思い出すのは、石原先生のクラスの時、A君が泳げるようになるまで、みんなで一緒に練習しようということをしたことですね。それを先日、石原先生と再会した時にきいたのですが、石原先生は、わざと障害児と過ごすことによく思っていない児童を、その泳ぎ方を教える役にした、ときいたんです。そういう障害を持った子との距離感というのは、人それぞれはっきりしてくるじゃないですか。私たち 2 人（大野と千葉）は関わっていた方の人間だから、分からないんだけれども、比較的避けていた子たちのなかで、わざと担当を決めてやったと。水泳が得意な教える側の子を、持ちあげな

がら、先生は進めたんだろうなと思って。その、敢えてぶつけるというところがポイントですよね。保護者とか、当時の本人たちも、そういう裏話があることは想像していなかったんじゃないかなと思いますね。そういう出来事がありましたね。感動の出来事としてよく覚えています。でも、実はそういうねらいがあったと先日、石原先生からききました。

石原　あれは、人選するのが大変でしたね。5 人ぐらい頼まないといけないと思いました。A君と距離を置いている子、そして、泳げる子も、泳げない子も一緒にね、やんちゃな子にも頼んで、やさしい子にも。一人一人に頼んだな。頼んだのは異色メンバーやったと思う。けど、楽しくなるのやね、やっているうちに。少しでもA君も泳げるようになると。

大野　ドラマのようで、最後A君が泳ぎきったときのクラスの一体感というのは、もう言葉になりませんでしたね。

石原　楽しかったね、あれもね。

教室でのドラマづくり

石原　小学校は毎時間教えるものが違うから、その時間ごとにドラマができるという楽しさがありますね。自分の先生としての勉強のために、いろんな取り組みをしている学校などを、先輩とか後輩から教えてもらったりして、見学しに行ったりしていたのですが、2 つだけ心に残っています。一つはある県の養護学校で年に 1 回、インドネシアとか南の方に行くんですよ。障害を持っている子にも原色のきれいな色を見せたいと思って。いろんなことでお金もいる。でも、それを目指していこうと取り組まれていました。それらの動きことを、そこの先生は「はったりをいう」と言い方で話されていました。「はったり」は何かなと思ったのですが、ウソのはったりでなくて、これしたいと思うのを、子どもにも言うし、職員にも言うし、自分にも言う。もう決めてしまう、方向を。そうして、定めていくということが大事だということが残っています。

クラスの初めの時は、必ず言いましたよ。前のクラスは、これがよかった、あれがよかったと。よかったことを山ほどいうんですよ。そうしたら、子どもたちは嫌がる。

千葉　覚えています！どんな嫌味な先生かと思いました。

石原　そうそう。前はよかったと楽しそうに私が言うんですよ。でも、これは絶対マネするなよ！といって、そこからを新しいクラスのスタートにするんです。それで、これはやめてくれよ、君らはちがうと。こんなこととか、あんなことあったけれども、前のクラスですよと、ずっと言い続けましたね。そうしてクラスを新年度スタートしながら、それでひとつの「はったり」のような、こんなクラスになったらいいね、というのを次にいっていました。

大野　嫌味やなと思ったん？

千葉　こんな先生は初めてやなと思って。

石原　初めは嫌味っぽく、オーバーにいってましたね。

大野　子どもたちに「何くそ精神」を出させたんじゃないかな、その時点で。

千葉　反動、反発でね。

石原　始めにそういってから、こんなこと

ができたらいいな、こんなことができたらいいなというのをちょっとずつ言っていこうと、思ってやっていました。それが「はったり」でクラスの目標でもありました。

教育は楽しく！

石原　それと「教育は楽しく」というのは、自分自身にもまわりの人たちにもずっといってきました。校長になっても、教頭の時も、ヒラの時も、ずっといってきました。自分が楽しくなかったらいけないから、教育というのは、やる側が楽しくないとね。自分自身が楽しくなかったら、子どもたちも楽しいはずがありません。教育というのは「たのしく」というのを外したら、学校を辞めなくてはならないなと、そのぐらい思ってきました。自分が楽しいと思っていないとやっていられないからね。

鶴谷　同じですね。教育はエンターテイメントというのを聞いたことがありますが、あの言葉もピンときました。

石原　それがあったから続けられたようなものです。

　もう一つはある時、クラスづくり、学級づくりというのを真剣に取り組んで、今までやっていないような先生とも、一緒にやっていこうかということで、いろんな取り組みをしました。それでも、他の実践を見ると、もっと素晴らしいクラスがある。ある中学の先生、後輩だったんだけれども、その人の実践をきくと、すごい差がある。私がやっていることと。子どもの元気の良さとか活力が違うのよね。どうしたら、そんなクラスになるんですか？ってきいたんですよ。「それは石原先生、簡単ですよ。子どもを好きになることではないですか？そこからじゃないですか？」とズバッといわれてね。それから、そのことを忘れずにやりましたね。なかなかすぐには好きになれない子どももいるけれども、好きになろうとすると、案外フィーリングというのは人間というのは感じるところがあると思いましたね。

鶴谷　子どもらが好きになってくれれば、クラス運営はうまくいきますね。

石原　そうなんですよ。でも、そんなことやっぱり、なかなかうまくいきません。腹の立つこともありますし。

元児童のその後

千葉　福祉の大学にいったな二人とも。

大野　そうやね。

鶴谷　影響ですかね。

石原　もともと持っていたものがあるから…。

大野　先生は、そういってくれるけれども、意識として、先生の影響だと考えるのが私のなかでは当り前だと感じていますね。自分の幼少期の経験（自閉症といわれていた）も踏まえて、全ての物事に対して「差別をされること」に関することは、小学校時代に私らに根付いたこととしてはよかったと思っています。今の私がやっていることとか、生きていくなかでは間違いなく先生の影響を受けていますね。（千葉君も）はっきりいえるよね。

千葉　そうやな。振り返ると、やっぱりやね。

大野　そこまで発動させた、きっかけを先生がくれたね。そもそも、なんでこの座談会に至る前に、小学校時代を注目し始めたきっかけ覚えている？

千葉　…なんやったっけ？

大野　私が京都で個展をしたときに千葉君が遊びに来てくれて、私が大学の冊子に書いた文章の中で、小学校時代にも自分のルーツがあるってことを書いたものをみつけて、すぐコンビニにコピーに行ったよね。私はそこに小学校時代の影響に関する文章を書くぐらい、実際にその頃のことを鮮明に覚えているわけだし。

石原　いいようにいってくれるけど、カッコよく言うと、やっぱり「ドラマ作り」をしたいというのはあったね。なんか、それが楽しくなるんじゃないかなというね。嫌みもいうけど、結果的に楽しくなるんじゃないのかなってね。

大野　決定的なのは、こんな世の中きれいごとでは、おさまらないというところにたどりついたことがあるというか、成し遂げた経験が、小学校で出来上がっているのよね。プールのことにしても、しっかり目標を持つこと、夢を見ること、疑いもせず、そこに向かうこと、というのは自分の生き方として、これだというのがある。振り返っても、私自身が自閉症と疑われていた幼稚園時代とは全く違った、小学校 5 年、6 年時代に意気揚々とした自分がいるからね。

中学時代の苦しみ

千葉　そうやな。あと、時期的に、その後の中学の時って大変だったんですよね。小学校の時って、いろんなことが素直にできるけど、それが段々ね。

大野　そうだね、わかる、わかる。

千葉　自分にもカッコつけたいとか、まわりのやんちゃな子にもあわせていかないといけないという時に、じゃあ、そういう場面で、今まで一緒にいた障害を持っていた子に、どう接することができるかというのは、すごい苦しみました。

鶴谷　やさしさがカッコ悪いみたいな。

千葉　そういう時期ですよね。あいつと仲間なん？とかいわれたりしてね。そういう問題じゃないだろうと。小学校の時に、先生方に教えていただいたし、分かっているし、実感もあるけど、じゃあ、それを素直に出して、この集団の中で生きていけるのかと。

石原　そういうのあるからね。全部が千葉君みたいな考えと違うからね。だから、非常に難しいよな。5 クラスあったら、クラスによっても違うし、学校によっても違うし、複数の学校が集まって、中学校になっているから、それまでと違うというのが確実にあるもんね。

千葉　もうひとつの小学校の方には、障害のある子が確かいなかったか、少なかったかでしたね。それが同じ中学に入学した。僕らは、生活の中に、こんな時もあるわなという、その障害を持った子に付き合うという場面もあるんです。それが普通でした。ものごとの進み方が。けれども、別の小学校出身の子は、そういう経験が少ないからか、いじめるわ、からかうわ、閉じ込めるわ。

鶴谷　あからさまだよね。

千葉　やるんですよ。それに自分自身が戦

えなかった。せっかく教えてもらっていて、分かっていたのに、そんな自分に悔しいというのかな。

大野　中学に入ると、ますます男女の距離がパッと別れるところもあったから。障害を持った友達はその時はみんな男子だったし。

千葉　成長の時期的にもそういう時期だしね。

大野　そう、男女が一緒にいない時間も増えてくるわけじゃない。

千葉　そうやな。あの頃は、私の苦しみですね。中学でも、全生徒の前で、A 君のお母さんが講演してくれたんですよ。多くの生徒があからさまにきいていない。

鶴谷　きくこと自体がダサイみたいな時期だからね。

千葉　何をいってるんだ、障害児の親が！みたいな。それが敗北感というか、あのお母さんにも申し訳ないなと感じました。たくさんお世話になって、一緒にすごしてきたのに。

大野　ほんまやね。きっと傷ついているだろうなという、しかも目の前でね。

千葉　それでも、お母さんは前で話すんです。今思い返しても、その勇気は本当にすごいなと思います。

大野　そういうことだよね。でも、親も一緒に、そういう現実に向きあえるかどうかというのがあるよね。普通教育を受けさせてくれるところに行くのか、特別教育に行くのかというところであるね。「もういい、これで」ということになるのかどうかっていうところですね。

鶴谷　中学時代はあるね。

千葉　しんどかったです。今思い出しても、やり直したいというか、やり直してもできるかなって思うし。

鶴谷　相当ハードル高いですよね。

千葉　やっぱり、そうですかね。

鶴谷　その中学生の時期って、そう素直にやさしさを出すというのはダサイというか、やんちゃな方が勢いを絶対持っているし、カッコよく見えるし。

大野　まあでも、中学はそういうところに入る余地が女子にはなかったな。特に男子のなかで起こっていたことに関してはね。

石原　小学校は女子の方が成長もはやいし、小学校では女子の力で持っている部分もありましたね。それと男子がうまく絡み合っているというのが、小学校でのクラスのひとつの形かもしれないね。中学入ると、男女は精神的にも違ってきたりするからね。

はやくから一緒に過ごす

千葉　基本的なことをいうと、はやくから障害を持った子と一緒に過ごしたという経験は、僕はよかったなって思っています。

鶴谷　子どもには大きな経験だと思いますよ。

千葉　そんなことない？

大野　その経験を良い経験であると認識したことがとても重要だと思う。

　知っているある家族は、障害を持った人と過ごしてきたことで、障害っていうだけじゃなくて、どんなものにも、いろんなものにもためらわず、手を出せるようになった。そういうことは、どんなにまわりがこんなふうになってほしいと思っていても、そのチャンスになるステージ、場所がなか

なかない。自然にふれて、野生動物に触れて、もしくは動物園で触れてできるようになるのとは、ちがうわけで、そういう機会が近くにあったおかげで、その子たちはそれに関して、立派に育つ。そういう機会が私たちにはあったのだろうなと思う。今の私たちにとっては、そこがあったから今がある。これは、そもそも社会としては、すごく重要な話です。

一緒にいるのが自然

鶴谷　それと、言葉が難しいけれど、慣れみたいなところ。

千葉　一緒にいて自然というか。

大野　そうです。そうです。

鶴谷　核家族でずっと過ごしている子は、例えば保育園の例なんだけど、高齢者の施設に慰問に行くと、しわしわの手が触れない。おじいちゃん、おばあちゃんに慣れていない子たちだからです。慣れている子どもは平気で握手とかできるんだけれども、しわしわの手をみただけで抵抗を感じてしまう。それと似ているところもあると思う。

大野　そうだと思いますね。

鶴谷　日常的に、ふれあいがあるとね。

居場所を求めて

千葉　先程、障害を持った子を受け入れて

いる幼稚園に障害を持った子が集まるという話もありましたが、人数の割合も、障害の子が集まるというのはあんまりよくないと思っています。社会普通にまんべんなくしたら、そんなに集まっていないというのが普通ですよね。

石原　当時、豊中に引っ越す人が多かったですよ。障害を持った子の保護者が障害を持った子を学校が受け入れてくれているから。

鶴谷　もう今そういう現象が起こっていますね。わざわざ受けいれてくれるところに引っ越して入ると。近くにもあるけど、そこはいっぱいで。県外からは、受け入れないとしたらしいですけれど。

大野　私たちの時も、他の学年にも結構いたんだっけ、全然覚えていない。

千葉　あんまりいなかった。

石原　全体ではあんまりいないと思う。

千葉　うちの学年が多かった。

大野　普通に学年の人数も多いんだけどね。

地域の学校はイヤ！

石原　障害がある保護者も、普通の地域の学校に行かせたくない！というご家庭もありました。世間の目があるから行かせたくなくて、特別（養護）学級だけ、もしくは養護学校にいかせる気持ちを持っているご家庭も結構おられましたね。

障害を持った子が普通学級で学ぶということがね、なかなか一般的でありませんでしたから。昔からいう、教育の目指している当たり前の姿があって、障害のある子がいて、当たり前、共に過ごして当たり前という。そういう世界、世間にしていこうというのが大きな願いです。でも、そういう気持ちというか、そこまで持てない保護者がいたのは事実ですね。障害が重い子どもの保護者であればあるほど、地域の学校には行かせたくないと思っていた傾向があるね。

大野　あー。

石原　行くと白い目で見られて、その子がいじめられるんじゃないかと思うと、障害を持った子だけがいる学校に行かせた方が安全ではないかという考え方です。その方がその子にとってもいいのではないかというのも、物凄いありましたね。それを崩すのが本当に大変でした。障害がある子がいるのは、ここの家ですよというデータが就学前から学校にはあがってきていました。ですので、先生何人かで障害を持った子がおられるご家庭に訪問に行きましたよ。「私たちのいる地域の学校に是非来てください！」というふうに誘っていかないと、なかなか来てくれないこともありましたね。

千葉　**大野**　へー、すごい、今もそうなんかな。

石原　当時は、そんな時代でした。今はちょっと分からないけどね。

鶴谷　特別支援という考え方が始まってからは、だいぶ流れが変わって来たんじゃないかな。

石原　今はだいぶ違ってきた。当時は大変や。家から外に出す、親も子を家から出すということが大変な時代やから。

大野　屋久島で出会った障害者も似たようなケースがありますよ。あまりにも障害を持った方に島で出会わないから、なんでなんだろうと思っていたのですが、簡単にい

えば牢屋のようなところに入れられていましたね。

石原　明治、大正、昭和で、そういう時代が長かったからね。

大野　私が屋久島にいったころ、まだあったんですよ。ある方がいて、身体に障害があって、話は普通にできて。けれども、育てられ方が、家族も完全に、その子に対して、わがまま放題で育てたのか、何でも許される状態をまわりがつくって来たようでした。私は、本人ができないことはしても、できることは自分でしてね、というのが私の当たり前で、私がその人の近くにいても必要以上はしてくれないことに、不満をその人は感じて。

鶴谷　何で大切にしてくれないんだと。

大野　そうそうそう。ま、でも散々やり取りしたあとに、その方は「睦ちゃんは、なんで普通なの？」ときいてこられました。特別扱いをされすぎたが故に普通に扱われることにためらいを感じていたのだと思います。

鶴谷　物足りない、障害者だぞって！

大野　「そういうところに帰りたいの？」っていって、私もたくさんやり取りをした後だったからそんなやり取りになったのですが。しかも、本当にある程度、社会になじめていなくても、ほおっておいてもきちんと家に帰ってこれるぐらいの人だったら、毎日ぷらぷらしています。うちら世代（1972年生まれ）の障害を持った子もいて、いろんな人に話しかけてコミュニケーションはとれていたりするんだけれども、親がいなくなったら、どうするんだろうね。田舎だから、そのあたり差し障りのないぐらいの関わりという感じが出ています。

鶴谷　田舎にいけばいくほどね、その現実は。地域性もありますよね。

◆

障害を持った子が地域の学校で学ぶという取り組みは、特別支援教育の以前から、障害児教育の一つの方法、統合教育として進められてきました。冒頭にも述べたように、現在、インクルーシブ教育というかたちによって、再び障害を持った子と地域の学校で一緒に学ぶ場面を見直す動きが出てきています。他にも同じような場面として、幼稚園、保育所、児童養護施設等において、障害を持った児童も健常の児童と同じ場面におり、そこで、援助を受けるという場面が増えているというのがあります。その理由としては、発達障害という新しい障害概念の登場による新しい障害者の登場、少子化による児童の減少により児童サービス自体が障害児も含めて考えないと維持できないところが出てきたという現実もあるように思います。また、これらの背景には、地域で暮らす権利意識の向上や、障害があっても教育を受ける権利意識の高まりなど、様々なものが考えられます。養護学校、特別支援学校が児童１人に対して、教員が１人～2人という状況も考えるとコストも大きくかかっています。それらを総合した結果としての、地域の学校で障害の有無に関わらず教育を受けるインクルーシブ教育という流れに向いているようです。

今回の座談会では、そんななか、現場で工夫をし、苦労をし、試行錯誤をしながら、子どもたちの教育、保育に汗を流す人々の姿と、その思いに少しは触れることができたかもしれません。ですが、十分に語りつ

くせたとは到底思えません。

実際にこの原稿の作業中にきこえてきたのは、統合教育を経験した豊中出身者が成人期の障害者への問題意識が低いという話です。障害を持った友達と当たり前に過ごしたが故に、豊中出身者は、成人しても障害を持った人も学校時代と同じように何とかなっているのではないのかと思って、成人期の障害者施策に関して問題意識が低いという話しでした。これも、障害を持った友達と一緒に過ごしたから何もかも解決するというものでないことを物語る話です。

座談会を終えて

●鶴谷主一

対人援助マガジン、幼稚園の現場からⅣに「障害児を受け入れること」について書いたときは、「やっと本気で目の前にいる障害児とその親御さんに向き合った」園長の悩みをレポートしたような内容でした。もっときちんと受け入れ、取り組んでいる幼稚園もあると思います。そんな方からのご意見も頂ければなあ、という気持ちもありました。

今回の対談は、障害児受け入れ初心者の私にとって、とても興味ある対談でした。実際に障害児のクラスメイトと過ごしたお二人と、その担任の先生とお話ができ、行われていたことや、当事者の気持ちが伺えて、知らなかった話をたくさん聞かせて頂き刺激になりました。また、専門家同士の話ではなくて、一般人？の私や大野さん、石川先生も教職だけど障害児専門職ではない、そんなメンバーがいろいろと話し合えたことは有意義だったと思います。

今年の８月５日に障害者基本法の一部を改正する法律の公布・施行の通知が文部科学省から出され、県の担当課を経由して各園に文書が通知されました。共生の理念、インクルーシブ教育の推進が謳われていましたが、県主催の「早期からの支援体制のありかた」というシンポジウムに出かけてみても、「早期から」に大きな役割を担うであろう私立幼稚園からは出席者はたったの２名。250 人ほどの出席者のほとんどは公立の方か関係者の方･･･どうみても内輪でやってるような印象を受け、共生の意識を一般化していくことの難しさを感じたのでした。

今回の企画が少しでも外へ発信していくことにつながれば嬉しいですし、参加させて頂きありがたかったと感じています。

●大野睦

鶴谷さんのお話を聞いて初めて見えた視点がいくつもありました。障害を持つ同級生と一緒の教室で過ごすことが当たり前だと思っていた私たち。３０年近い年月が過ぎても変わらない現実としてある数々の問題を、それもまた様々な視点からひとつずつ歩み寄れる社会にしなければと感じた一日でした。

石原先生が当時のことを鮮明に覚えておられたことも驚きでした。それだけ思いを込めて日々の学級運営をしていただいていたのですね。

どんなこともそうなんでしょうが、長い年月を経て初めてその意味を受け止めることが出来るところもあるのだと、日々変わらないことに屈せずその情熱を絶やさずにいたいと思います。

鶴谷さん、イシセン、バチケン（千葉）本当にありがとうございました。

●千葉晃央

なぜ、こんなこと企画したのか？それは、あの時も、そして今も、これまでも、障害を持ったご本人、そしてそのご家族、がんばっている先生たちの姿が目に浮かぶからです。その場面を経験した私たち。発信し、残すことが今の私たちにできることだと考えました。

おわりに

インクルーシブ教育というかたちで、今後も起こるであろう、障害をもつ子と共に過ごす場面。そんな、障害を持った子と一緒に過ごす対人援助場面で働いている方々へのエールや、参考になればと思います。

この座談会で取り上げられた内容には多くの社会の課題が含まれています。子どもの発達、障害児・者問題、差別、教育、人権、地域格差、「障害がある」というのか、「障害を持つ」というのかというような言葉の問題…等尽きることはありません。今後も、この対談をきっかけに多くの議論が様々な場所で起きることを期待しています。そして、私たち自身もそんな一つの場をまた持ちたいと考えています。

石原愃先生、鶴谷主一先生、大野睦さん、本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

編集：石原愃　鶴谷主一　大野睦

写真：大野睦　千葉晃央

責任編集：千葉晃央